

女子尿道下嚢腫の1例

奈良県立医科大学泌尿器科学教室（主任：石川昌義教授）

井本 卓，岡島英五郎，奥村秀弘，
平松 侃，吉田宏二郎，牧浦 洋，
本宮善恢，岡本政和，林 威三雄

SUBURETHRAL CYST OF FEMALE: REPORT OF A CASE

Takashi IMOTO, Eigoro OKAJIMA, Hidehiro OKUMURA, Tadashi HIRAMATSU,
Kohjiro YOSHIDA, Hiroshi MAKIURA, Yoshihiro MOTOMIYA,
Masakazu OKAMOTO and Isao HAYASHI*From the Department of Urology, Nara Medical University
(Chairman: Prof. M. Ishikawa, M. D.)*

A case of suburethral cyst of female was reported. The patient, 55-year-old house wife, was admitted to our clinic with a chief complaint of dysuria. A small hen-egg sized tumor at the anterior wall of the vagina was observed, and extirpation of it was made. Postoperatively, suburethral cyst of female was diagnosed. We discussed relationship between suburethral cyst and vaginal cyst.

はじめに

尿道腔中隔部およびその付近は胎生学的な異常や、後天的ないろいろの原因によって嚢腫を形成することがある。これらの嚢腫の多くのは無症状に経過するが、そのうち少数のものは産婦人科的訴えのため、または偶然の機会に発見され、腔嚢腫として報告されていることが多い。

最近われわれは尿道腔中隔部の嚢腫の1例を経験したが、本例においてはその主訴は排尿困難で、手術所見からも腔よりも尿道との関係が強いように思われたので、この症例に対しては尿道下嚢腫とよぶのが最も妥当と考えた。

症 例

患者：窪○玉○ 55才 主婦
初診：1968年7月16日
主訴：排尿困難
家族歴：特記すべきことなし
既往歴：腸チフス，1942年ころ
肋膜炎：1957年ころ虫垂炎：1963年ころ
分娩 6回

現病歴：約5年前より排尿困難，尿線の細小および頻尿を訴え，1968年7月16日当院婦人科を受診し，尿道腔中隔部の腫瘤を指摘され当科へ紹介された。

現症：体格，栄養ともに中等度で，胸，腹部の理学的所見には異常はない。

局所所見は腔入口部約2cm内方から腔前壁正中部に小鶏卵大で腔腔に向かって半球状に突出した腫瘤が存在する。この腫瘤内容は腔壁より透見できず，また触診では表面平滑，境界鮮明，弾力性硬で波動はなかった。腫瘤を圧迫しても外尿道口よりの排液，腫瘤の縮小および圧痛はなく，穿刺しても排液はみられなかった（Fig. 1）。

○一般検査所見

血圧：140mmHg
血沈：1時間値 12mm，2時間値 20mm.
梅毒血清反応：陰性
血液所見：赤血球数 428×10^4
血色素量 71% (Sahli)
白血球数 4,000
白血球百分比 正常
血液化学所見

総蛋白	7.2g/dl
A/G 比	1.4
Urea N	13mg/dl
Na	136mEq/l
K	3.7mEq/l
Cl	100mEq/l
Ca	5.9mEq/l

肝機能検査：正常

心電図：正常

○泌尿器科的検査

尿所見：外観 清澄

比重 1025

反応 酸性

蛋白 (－)

沈渣 病的所見なし。

尿道膀胱鏡検査：Fr. No.17 尿道膀胱鏡の挿入は容易であった。尿道は外尿道口より約 1cm 膀胱側の所より膀胱頸部近くまで下方より圧迫され隆起していたが憩室口は認められず、腫瘤を圧迫しても尿道内への排液はなかった。膀胱内景および膀胱頸部はほぼ正常であった。

レントゲン検査：腎膀胱部単純撮影にて腎膀胱部に結石陰影を認めなかった。

静脈性腎盂撮影にて両腎ともに排泄良好で著変は認められなかった。

尿道膀胱造影前後像で膀胱底の軽度上昇、斜位像で後方よりの尿道の圧迫を認めるが腫瘤内への溢流像は認められなかった (Fig. 2, 3)。

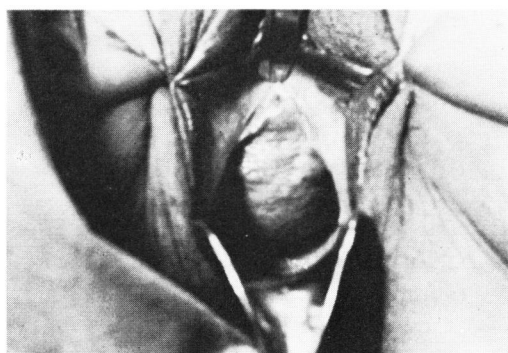


Fig. 1 腔前壁部の小鶏卵大の嚢腫が腔腔に向かって半球状に突出している

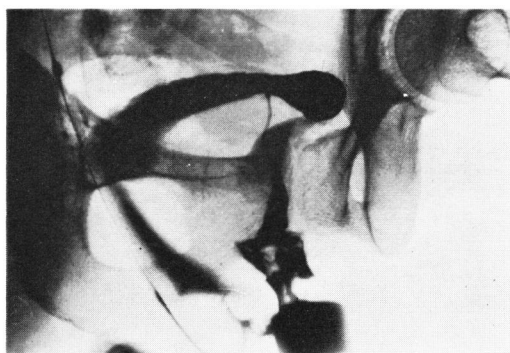


Fig. 3 尿道膀胱レ線像 (斜位像)

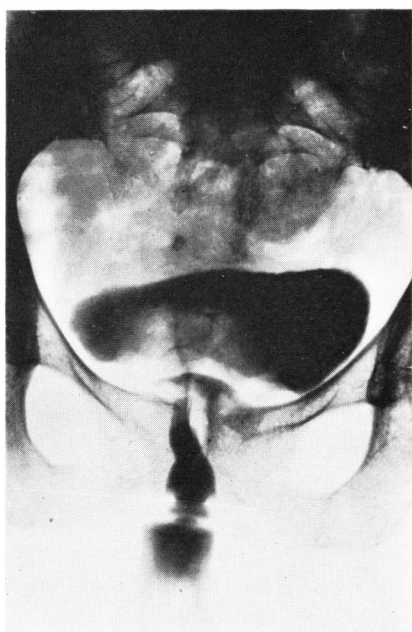


Fig. 2 尿道膀胱レ線像 (前後像)

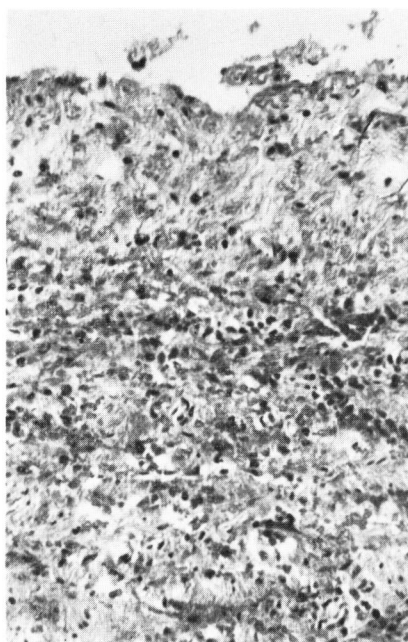


Fig. 4 嚢腫壁の組織像

腫瘤の針生検：経腔的に腫瘤の針生検をおこなったがその組織像は変性の強い移行上皮細胞と思われる細胞がみられたが悪性像を思わせる所見はなかった。

上記所見より尿道腔中隔部腫瘤と診断し、1968年8月6日腫瘤摘出術を施行した。

手術所見：腔前庭部に横切開をおき、これを腔壁にタテに延長した。この腫瘤は小鶏卵大で、腔壁とは全く癒着がなく、容易に鈍的に剥離することができたが、尿道側とはかなり強い癒着があり、鈍的操作の途中で、一部嚢腫壁が破れ、ゼラチン様の内容が流出した。また尿道壁も少し損傷したが、嚢腫壁を残さないように完全に摘出した。尿道および腔壁をそれぞれカットグートで縫合し、尿道には留置カテーテルをおいた。

組織学的検査所見：嚢腫壁は浮腫状となりその中に形質細胞を主とする炎症性細胞の浸潤が軽度に見られる。筋層は存在し、一部は変性をおこしている (Fig. 4)。

術後経過は順調で留置カテーテル抜去後は排尿困難はまったく消失し9月2日全治退院した。

考 按

尿道腔中隔部は胎生学的な異常や、感染や外傷を主とする後天性の原因によって嚢腫をつくりやすい。このうち、多くのものは無症状に経過するが、なかには妊娠や分娩などのときに産科で偶然発見されたり、該部の腫瘤形成や産婦人科的訴えて受診し、腔嚢腫として報告されている。すなわちこの部分の嚢腫はかなり大きくなっても尿道に対する影響は案外に少なく、尿路症状を主症状とするものはきわめて少ない。したがって泌尿器科を受診することは少なく、現在までに腔嚢腫として報告されたものが36例¹⁻²⁵⁾もあるのに対して、尿道嚢腫または旁尿道嚢腫として報告されているものはわずか6例²⁶⁻³⁰⁾にすぎない。この両疾患は類似疾患と考えられるが、腔嚢腫は多様性であり、まったく別の概念のものも含まれているので、ここではいちおう別の疾患として取り扱うこととした。

1. 診断名について

前述したように、尿道腔中隔部にある嚢腫はその部位的関係や訴えのために産婦人科領域から腔嚢腫として報告されているものが多いが、この腔嚢腫とわれわれの症例とが同一疾患と考

えることには抵抗を感じる。むしろ尿道とまったく交通のない憩室様のものと考えたほうが理解しやすい。このような疾患に対して、Johnson³¹⁾は cyst of the female urethra という名称を用いているし、また山下ら²⁹⁾は腔嚢腫との関連性について述べ、Lowsley による periurethral cyst 旁尿道嚢腫の名称で報告した。われわれの症例は尿道腔中隔部に存在したが、婦人科的な訴えはまったくなく、排尿困難を主訴とし、手術的所見からも尿道よりもさらに腔との関連性が少なかった。すなわち尿道と開口部がないということで尿道憩室と異なるもので、本症例に対しては Everett^{32,33)} の suburethral cyst 尿道下嚢腫の名を用いるのが最も適切と考えた。

2. 本邦症例について

尿道下嚢腫という報告は見当たらないが、女子尿道に關係ある嚢腫として、尿道嚢腫あるいは旁尿道嚢腫という報告例を集計すると、Table 1 のように6例がみられた。

このうち、井尻の症例は尿道と交通があり、腔よりの圧迫により外尿道口より多量の膿汁の排泄がみられたもので、尿道憩室ではないかと考えられるものである。その他の症例の概略は一括表示したとおりである。

なお腔嚢腫の報告例の中にも、この範疇に入れたほうが良いと思われるものもあるが、腔嚢腫という名称を尊重して、ここではふれないことにする。

3. 発生原因、症状、診断および治療について

発生原因は尿道憩室と同様と考えられるが、この点についてはすでに多数の人びとにより詳しく論述されている。しかし臨床的には、その発生原基を推定することは困難な場合が多く、われわれの症例のように嚢腫壁が強い変性に陥っているようなものではいっそうその発生原基を知ることはむずかしい。

症状としては腫瘤形成以外の自覚症状として、排尿痛、尿失禁および残尿感などが報告されているが、われわれの症例のような排尿困難を訴えるものは見られない。

尿道腔中隔部の嚢腫がいちじるしく増大した

Table 1 女子尿道に関係ある嚢腫

症例 番号	報 告 者	発表 年次	患者 年令	主 訴	診 断 方 法	臨 床 診 断	治 療 法	予 後
1	井 尻 辰 之 助	1936	60	膿 排 尿 痛		尿 道 嚢 腫	用 手 圧 迫	不 明
2	重 松 俊 後 藤 有 司	1954	25	尿 失 禁	尿 道 鏡 レントゲン	尿 道 嚢 腫	経膀胱的に切除	失禁消失
3	森 田 茂 豊 島 佐 木 昭 吾 々 恒 臣	1961	47	腔前壁の腫瘍	触 診 panendoscopy	外尿道口部嚢腫	経腔的に摘除	全 治
4	森 田 茂 豊 島 佐 木 昭 吾 々 恒 臣	1961	26	残 尿 感	穿 刺 診 触 尿 道 撮 影	外尿道口部嚢腫	摘 除 術	全 治
5	山 下 源 太 郎 児 玉 直 彦 島 村 昭 吾	1963	36	腔前壁の腫瘍	嚢腫穿刺造影	旁尿道嚢腫	摘 除 術	全 治
6	三 原 謙	1965	30	排 尿 時 疼 痛 尿線のかたより	試 験 穿 刺 造 影 剤 注 入	尿道旁管嚢腫 (Skene 氏腺 嚢腫)	摘 除 術	全 治
7	自 験 例	1969	57	排 尿 困 難	触 診 線 撮 影 尿 道 鏡	尿道下嚢腫	摘 除 術	全 治

場合には、当然尿道を圧迫することが予想されるが、実際には腔のほうにおよび、尿道に影響を与えることは非常に少ないものである。腔嚢腫の36例の中に、泌尿器科の訴えをもったものは、排尿痛および尿意頻度を訴えた緒方⁴⁾と原田ら²⁰⁾のそれぞれ1例があるが、排尿困難を訴えたものは1例もなかった。

診断は触診、尿道鏡、レントゲン撮影などで比較的容易であるが、尿道憩室との鑑別が必要であり、尿道との交通のないことを確認しなければならない。

治療は嚢腫が小さいときには放置してもさしつかえないが、本例のようにこの嚢腫のために排尿困難をきたしているような場合には、外科的に摘除すべきである。この手術に際しては原田ら²⁴⁾の女子尿道憩室を切除するための新しい侵入路が参考になる。

お わ り に

- 1) 排尿困難を主訴とした55才女子の尿道下嚢腫の1例を報告した。
- 2) 尿道腔中隔部の嚢腫は、その発生部位および臨床症状から、婦人科領域で腔嚢腫として報告されているものが多いが、本症例のように排尿困難が主訴で、腔よりも尿道と深い関連性が考えられるものには尿道下嚢腫という名称が適当と考える。両疾患の異同について少しく論述した。

本論文の要旨は第49回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

石川昌義教授のご校閲を深謝する。

文 献

- 1) 佐久間兼信：医学中央雑誌，7：1656，1909.
- 2) 沖津 亘：朝鮮医会誌，15：36，1916.
- 3) 石川信男：近世医学，7：63，1918.
- 4) 緒方英俊：大正婦会報，10：320，1921.
- 5) 松本藤繁：岡山医学会雑誌，No.420：213，1925.
- 6) 山岡直衛：近畿婦会誌，10：281，1927.
- 7) 大城満助：近畿婦会誌，16：303，1933.
- 8) 張 房雄：日産婦会誌，29：421，1934.
- 9) 屋代周二・江崎合邦：産科と婦人科，2：211，1934.
- 10) 吉村 修：熊本医会誌，11：1621，1935.
- 11) 横田勝美：大阪回生病院臨床集報，20：135，1937.
- 12) 秋間泰造：皮膚泌尿会誌，46：182，1939.
- 13) 住吉嘉雄：東大産婦人科同窓月報，69：17，1942.
- 14) 遠藤幸三：十全会誌，49：17，1942.
- 15) 藤井和郎・宮川糧平：産科と婦人科，14：285，1947.
- 16) 朝岡 覚：産科と婦人科，15：87，1948.
- 17) 山本哲雄：産科と婦人科，16：273，1949.
- 18) 武田 勉：産婦人科の世界，2：192，1950.
- 19) 木村嘉一・土屋忠彦：京都医会誌，2：253，1951.
- 20) 原田 浩・関本泰男：臨婦産，8：723，1954.

- 21) 安武豊志男・泉 勝視：臨婦産，**12**：9，1958.
- 22) 清水圭三・須山敬二・瀬川昭夫・加治安彦：日泌尿会誌，**51**：10，1960.
- 23) 和田 等・堀田克介：臨婦産，**15**：1021，1961.
- 24) 宮野 誠・小柳賢一：日産婦東京会報，**13**：11，1964.
- 25) 安田 貢・桐村正憲・新井俊五郎：産婦人科の実際，**14**：238，1965.
- 26) 井尻辰之助：実地医家と臨床，**13**：1067，1936.
- 27) 重松 俊・後藤有司：日泌尿会誌，**45**：2，1954.
- 28) 森田茂豊・島村昭吾・佐々木恒臣：札幌医誌，**20**：73，1961.
- 29) 山下源太郎・児玉直彦・島村昭吾：日泌尿会誌，**54**：527，1963.
- 30) 三原 謙：日外会誌，**66**：126，1965.
- 31) Johnson, C. M. : J. Urol., **39** : 506, 1938.
- 32) Everett, H. S. and Williams, T. J.: Urology edit. by Campbell, M. F. 2nd edit., p. 2120, W. B. Saunders Co., Philadelphia and London, 1963.
- 33) Everett, H. S. : Gynecological and Obstetrical Urology. 2nd edit., p. 115, Williams and Wilkins Co., Baltimore, 1947.
- 34) 原田直彦・磯部泰行・奥田 暲：手術，**19**：793，1965.

(1969年12月9日受付)